

持続可能な地域社会の形成に向けた社会教育の あり方について

～予測が困難な時代を生きていく中で～

(提言)

令和3年3月12日

山口市社会教育委員会議

目次

1	はじめに	1
2	地域社会を取り巻く背景	2
	（１）社会環境の著しい変化	2
	（２）社会教育を取り巻く環境の変化	2
3	新型コロナウイルス感染症の発生とその影響	5
	（１）新型コロナウイルス感染症の発生	5
	（２）新型コロナウイルス感染症による影響	5
4	「つながり」に着目した地域社会・社会教育の現状と課題	7
	（１）社会教育委員会議におけるこれまでの議論の整理	7
	（２）「つながり」に着目した地域社会・社会教育の現状の検討	8
	（３）地域社会を担う人々のつながりづくり事例の調査	10
	（４）「つながり」に着目した地域社会の課題の整理	11
5	持続可能な地域社会の形成に向けた社会教育のあり方 ～予測が困難な時代を生きていく中で～	12
	（１）持続可能な地域社会の形成に向けて	12
	（２）つながりづくり支援の方向性	14
	（３）つながりづくり支援のために	14
6	おわりに	17

<参考>

○用語について	19
○提言に関する山口市社会教育委員会議の開催状況	21
○山口市社会教育委員名簿（50音順）	22
○地域社会を担う人々のつながりづくり事例の調査について	23

1 はじめに

ICT（Information and Communication Technology：情報通信技術）の発達、モビリティ（移動性）の拡大、グローバル化等により、農業から工業、情報、知識へと社会のあり方や産業構造が大きく変化している。地域社会の中で個々人の生活が完結しなくなった影響もあって、地域における活動の担い手の高齢化、固定化がますます進むこととなり、かつてのような地域社会における諸活動を維持していくことが難しくなっている。

国際的な動きとして、2015 年 9 月の国連サミットにおいて、SDGs（持続可能な開発目標）が採択され、「誰一人取り残さない」をテーマに、全てのステークホルダーが役割を持つ「参画性」、社会・経済・環境に統合的に取り組む「統合性」等の特徴をもつ持続可能な世界を実現するための国際目標が定められた。

我が国においても、SDGs と共通する理念である持続可能な地域社会の構築に向け、「SDGs 未来都市」が選定され、第 2 期「まち・ひと・しごと創生総合戦略」において、SDGs の理念に沿った推進による地方創生の取組の一層の充実・深化が掲げられるなど、地域課題の解決により、住民の幸福度・満足度の向上を図ることで、地域社会の持続性を高めていく取組が求められている。

現在、地域住民が、学びやつながりを通じて、地域社会の変容に伴う様々な課題を共有するとともに、その解決に向けて、地域の福祉の増進やまちづくりなどを主体的に担う活動が展開されており、全国的にも社会教育の手法が注目を集めているところである。こうした社会教育への期待が拡大する中で、今後の社会教育のあり方の検討や内容の充実が求められている。

山口市社会教育委員会議では、人と人、世代と世代、組織と組織などの「つながり」に着目して、持続可能な地域社会の形成に向けた社会教育のあり方を検討することとした。また、今後の社会教育を効果的に進めるために、その検討材料として、つながりづくりの事例を収集した。

今回の提言が、持続可能な地域社会の形成に向けた、社会教育による、より効果的な人づくり、つながりづくりを進めていく一助となれば幸いである。

2 地域社会を取り巻く背景

(1) 社会環境の著しい変化

- 現代社会は変化の激しさが特徴である。技術革新の急速な進展、激しく変動する人口動態、多発する自然災害、グローバル化による価値観の多様化などにより、現在の社会経済環境の変化は「きわめて複雑で予測不可能な状況に直面している」と言える。こうした状況は、Volatility（変動性・不安定さ）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性・不明確さ）などで表現されており、これらをまとめて、VUCA（ブーカ）と呼ばれている。こうした現代社会の激しい変化には、過去の成功事例では対応できないことが多いため、その対応には柔軟な考え方や臨機応変な行動、学習を継続し深めていくことが求められている。
- 予測が困難な時代だからこそ、従前にも増して人々がつながり、話し合いにより、よりよい解決策、答えを導き出していくことが求められている。そして、ともに考えることで、それぞれが当事者意識を持ち、自分の事として課題をとらえ、主体的にアプローチしていくことにより、それぞれの人生をより豊かにすることができる。
- 人々がつながり、学び合いながら、課題への答えが形作られていくことが求められているにもかかわらず、つながりを面倒なものだと捉えてしまう傾向もみられる。
- 少子化、高齢化、人口減少、核家族化、単身世帯化、近隣関係の希薄化、生活様式の多様化もあり、地域社会における人と人とのつながりの希薄化が進行している。

また、個々人の社会生活においても、仕事や買い物などの経済活動を介してのつながりが中心を占めることで、人とのつながりがサービスと区別がつかなくなり、サービスを受ける側という認識の固定化が進むこととなった。そうしたことで、地域社会を主体的に担っているという意識を抱きづらくなっている。

(2) 社会教育を取り巻く環境の変化

- 現在、地域住民が、学びやつながりを通じて、地域社会の変容に伴う様々な

課題を共有するとともに、その解決に向けて主体的に担う活動が、福祉（地域包括ケアシステム、地域共生社会）、地域運営（地域運営組織）、まちづくり（「小さな拠点」づくり）など様々な分野において展開されている。

また、第3の教育改革とも称される「社会に開かれた教育課程」や「地域学校協働活動」の法制化など、社会や地域住民との思いの共有、多様な主体との連携・協働により子どもたちの学びを進めていくことの方方向性がより明確にされてきている。

・ 新学習指導要領 平成 29 年 3 月 31 日改定（幼稚園・小学校・中学校）

社会に開かれた教育課程

教育課程を通して、これからの時代に求められる教育を実現していくためには、よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有し、それぞれの学校において、必要な学習内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを教育課程において明確にしながら、社会と連携及び協働によりその実現を図っていくこと。

・ 社会教育法改正 平成 29 年 4 月 1 日施行

地域学校協働活動

より多くの幅広い層の地域住民、団体等の参画を得て、地域全体で子どもたちの学びと成長を支えるとともに、地域と学校が目標を共有しながら連携・協働して行う様々な活動。

社会教育法が改正され、法律上位置づけられる（第9条の7 地域学校協働活動推進員）。

・ 第3期教育振興基本計画 平成 30 年 6 月 15 日閣議決定

人々の暮らしの向上と社会の持続的発展のための学びの推進

少子高齢化や人口減少など、社会を取り巻く環境が急激に変化する中、今後の社会教育には、地域コミュニティの維持・活性化への貢献や、全ての住民が地域社会の構成員として社会参加できるような社会的包摂への寄与、社会の変化に対応した学習機会の提供が期待され、その重要性は更に高まっていくと考えられる。

・ 「人口減少時代に新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について(答申)」 平成 30 年 12 月 21 日中央教育審議会

地域における社会教育の意義と果たすべき役割

～「社会教育」を基盤とした、人づくり・つながりづくり・地域づくり～

新たな社会教育の方向性

～開かれ、つながる社会教育の実現～

・ 第2期「まち・ひと・しごと創生総合戦略」 令和元年 12 月 20 日閣議決定

【横断的な目標1】多様な人材の活躍を推進する

1-1 多様なひとびとの活躍による地方創生の推進

(2) 地方公共団体等における多様な人材の確保

社会教育関係の人材や施設を始め、地域における多様な民間団体等との連携や施設の活用を図り、地域人材の育成等を行う好事例の横展開を図る。

- こうした中、平成30年12月21日中央教育審議会による「人口減少時代に新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について(答申)」においても、地域における社会教育の意義と果たすべき役割を「『社会教育』を基盤とした、人づくり・つながりづくり・地域づくり」とし、新たな社会教育の方向性として、「開かれ、つながる社会教育の実現」を掲げ、社会教育への期待に応えていくための新しい視点を示されたところである。

「人口減少時代に新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について(答申)」(平成30年12月21日中央教育審議会)より

・地域における社会教育の意義と果たすべき役割

～「社会教育」を基盤とした、人づくり・つながりづくり・地域づくり～

人づくり 個人の問題意識や関心をきっかけとして個々人の学習が行われ、その学びの過程を通じて個人の知的欲求が満たされ、生活の改善や、人間としての成長、自己実現につながっていく。

つながりづくり 相互学習を通じて、相互に理解し認め合うことによる自己肯定感や幸福感、つながり意識などが醸成され、住民同士の絆が強まる。

地域づくり 地域で共に学び、問題意識を共有したり、相互に認め合い、自らが地域の中に居場所を持っているという肯定感を得たりする過程を通じて、地域に対する愛着や誇り、帰属意識が育まれる。このことは、住民同士が対話や議論を通じて地域の将来像を考え、自らも当事者としてよりよい地域づくりに持続的に取り組もうとする意欲にもつながる。

・新たな社会教育の方向性

～開かれ、つながる社会教育の実現～

社会を通じ、最終的に目指すべきは、個人の幸福な人生と、持続可能な活力ある社会の実現であり、その大きな鍵の一つが、「地域づくり」と考える。社会教育が「人づくり」「つながりづくり」という強みを最大限に発揮しつつ、「地域づくり」に大きく貢献しながらその目的を達成することができるよう、今後は、より多くの住民の主体的な参加を得て、多様な主体の連携・協働と幅広い人材の支援により行われる社会教育、すなわち、「開かれ、つながる社会教育」へと進化を図る必要がある。

- さらに、第10期中央教育審議会生涯学習分科会においては、上記答申を踏まえながら、人生100年時代の到来、Society5.0の実現などの社会の変化や課題を踏まえた新しい時代の生涯学習・社会教育のあり方や姿、「開かれ、つながる社会教育」へと進化を図っていく上で、民間団体や人材の活躍・連携の促進、関係機関や行政の役割等についての検討が進められている。

3 新型コロナウイルス感染症の発生とその影響

(1) 新型コロナウイルス感染症の発生

- 新型コロナウイルス感染症（COVID-19）とは、人に感染する「コロナウイルス」として新たに見つかった「新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）」による感染症で、2019年12月末に中国湖北省武漢市において感染者が発生し、2020年12月末現在、全世界で8,300万人を超える感染者が発生しており、現在においても終息の兆しは不透明である。

日本においては、諸外国の感染状況と比較すると、封じ込めが成功しているとされているが、2020年12月末現在の感染者は23万4,395例となっている。2020年春には学校の臨時休業、4月17日から全国における緊急事態宣言が発せられるなど、国民の生命・身体、日常生活、経済活動等にも多大なる影響を与えている。

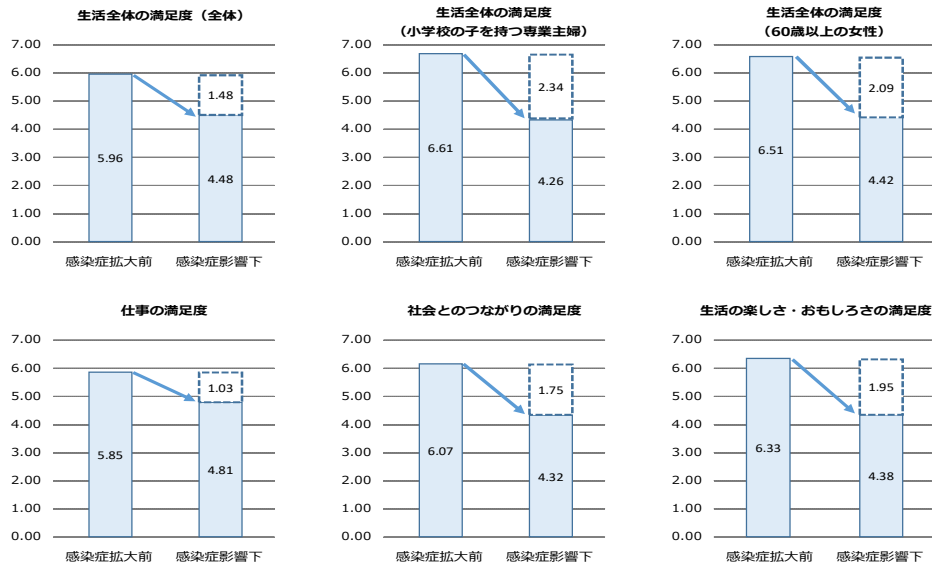
(2) 新型コロナウイルス感染症による影響

- 新型コロナウイルス感染症感染対策として、物理的な距離をとること、3つの密が重なることを避けることが必要となり、物理的に人とつながることが難しい状況にある。
- 経済活動にも大きな影響が生じ、飲食業や観光関連業を中心に需要が大きく減少している。小売業などの生活関連産業、医療、介護、福祉、運輸業などの従事者のみならず、その家族にもしわ寄せが及んでいる。
- 学校の臨時休業は、児童生徒の学習活動のみならず、家庭での対応も必要であったことから、保護者の働き方にも少なからず影響が及んだ。大学においては、長らく遠隔授業が続く、経済的理由や授業等への期待感とのギャップから

退学や休学を検討する学生も現れるなど大学教育の推進に多大な影響を及ぼしている。

- 地域交流センターをはじめとした公共施設の休館等の影響もあり、社会教育にも大きな影響を与えることとなった。
- 新型コロナウイルス感染への不安に駆られる中で、緊急事態宣言下等で市民が過剰に監視し合う現象や、感染者への誹謗中傷や差別的扱いも見られている。
- 新型コロナウイルスに感染した人や医療従事者を差別や誹謗中傷から守るため、令和2年4月の東京都を端緒として、差別禁止を盛り込んだ条例を制定する動きも見られた。
- 地域社会においても、極力接触を避けようとする動きから、各種団体においては対面による会議等の開催が困難な状況となった。
- 大都市圏や一部業界においてのみに浸透していたテレワークやオンラインの取組が新型コロナウイルス感染症拡大防止対策の面から急速に普及した。
- ICT技術の活用により、オンライン会議やオンライン研修会、対面とオンライン併用による会議等も見られるようになり、社会的距離を保ちながら、遠隔地との距離を埋める取組が徐々に展開されてきている。
- 内閣府が令和2年6月に公表した「新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査」では、感染症拡大以前と比べて、「家族」や「社会とのつながり」の重要性に関する意識について、より重要性を意識するようになったと回答している。また、生活満足度が全体的に低下しており、特に、「社会とのつながり」及び「生活の楽しさ・おもしろさ」分野の満足度についての低下幅が大きい調査結果となった。新型コロナウイルス感染症による様々な制約が人々の意識や生活満足度にも影響を与えていることが示されている。

質問 「全く満足していない」を0点、「非常に満足している」を10点とすると、①新型コロナウイルス感染症拡大前、②感染症の影響下、それぞれ何点くらいになると思いますか。



令和2年6月21日内閣府「新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査」より

4 「つながり」に着目した地域社会・社会教育の現状と課題

(1) 社会教育委員会におけるこれまでの議論の整理

山口市社会教育委員会においては、平成19年以降、以下の答申、提言等を行ってきた。特に、ここ10年間、「地域交流センター」「協働によるまちづくり」をキーワードとした答申、提言、調査研究報告を行っており、地域社会に関する現状の分析を継続的に行っている。

これまでの社会教育委員会における審議事項（答申、提言等）

	審議事項（答申、提言等）
H19.6.1	答申 「生涯学習を支援するための推進方策の方向性について」
H19.11.30	答申 「公民館が果たす機能の在り方に関する今後の方向性について」
H20.9.24	答申 「家庭教育支援の在り方に関する今後の方向性について」
H22.9.2	答申 「地域交流センターを拠点とした社会教育活動を振興するための方策について」
H24.9.20	提言 「地域交流センターを拠点とした社会教育活動を推進していくための提言」
H26.3.19	提言 「『協働のまちづくり』と社会教育の役割」
H28.9.15	答申 「『協働のまちづくり』を推進するためのライフステージに応じた人材育成の方策について」
H29.8.9	調査研究報告 「地域の学びを支援するために必要な人材の要件及び育成のあり方について」

- 「『協働のまちづくり』と社会教育の役割」（平成 26 年 3 月 19 日提言）においては、「協働によるまちづくり」を進めるための社会教育の方向性として、「新しい公共」の形成のために、地域防災や環境整備、安全・安心に関する課題解決的な学習、郷土に関する歴史や文化の伝承などを市民の学習課題として位置づけ取り組んでいくとともに、NPO やボランティア団体などとの緊密な連携の必要性や伝統的なコミュニティに依存してきた現状からの変革について提言している。
- 「『協働のまちづくり』を推進するためのライフステージに応じた人材育成の方策について」（平成 28 年 9 月 15 日答申）においては、「『協働のまちづくり』を進める社会教育は、個人的な趣味や関心を満足させるものに限らず、防災、環境の保全と整備、歴史と文化の継承、地域生活の質の向上などをめざす、新たな市民社会の創生を目ざす内容に重点を置くことが求められている」と言及している。

（２）「つながり」に着目した地域社会・社会教育の現状の検討

- 本市においても、少子化、高齢化、人口減少、核家族化、住民相互・地域相互のつながりの希薄化、価値観の多様化、地域団体の弱体化・形骸化、地域社会の担い手不足、後継者問題、地域への帰属意識・愛着の低下等により、地域社会におけるつながりの低下を意識せざるを得ない状況にある。
- 山口市社会教育委員会議においては、現状や課題を踏まえ、人と人との「つながり」に着目した協議・検討を行った。検討の概要を以下に記すこととする。

<検討事項>

- ①なぜ地域社会や社会教育に関わらないのか
- ②地域活動や社会教育に関わる人がいないと何が困るのか
- ③新型コロナウイルス感染症の影響

①の主な意見

- ・ 地域社会や社会教育に関わる時間がない。忙しい。
- ・ 自分のしたいことがしたい。関心が持てない。
- ・ 人間関係が煩わしい。自分が思うようにできない。
- ・ 助けてはもらいたいけど、自分は動きたくない。

- ・昔は世話焼きがいたが、今はしてよいか人の目が気になる。
- ・便利になりすぎて、隣近所と関わる必要性がなくなった。
- ・参加させようとするある種の強制力が昔はあったが、今はない。
- ・関わらなくなったのは、ある意味豊かになったということなのかもしれない。
- ・地域の中に危機的状況があれば団結する。危機意識を共有できるがどうか。
- ・人は深層的にはつながっていたい、一人では完全に生きていけないことを分かっている。
- ・地域で気軽に話す場があるとよい。

②の主な意見

- ・地域が沈む。
- ・災害などの有事の時に、地域につながりがないと困る。
- ・情報が入らないと孤立し、コミュニケーションが取れなくなる。誰かがいると、そこから情報が発信される。
- ・地域活動がある、関わることで豊かな生活を送ることができる。子どもに何かを教えることで自分の理解も高まり、自分も豊かになる。
- ・関わる人がいることによって、集団としての喜びと感動が味わえる。
- ・自分が豊かになるチャンスを逃すことになる。
- ・以前は、青年団や婦人会といった場で話をする中でいろいろな相談ができ、学ぶ場となっていた。その代わりとなる核が必要だが、やろうとする人たちの否定せず認め、支援する必要がある。

③の主な意見

- ・つながりの大切さがわかった（不安だったり、心配だったりした）。
- ・Face to Face の大切さがわかった。
- ・何らかのかたちでつながり続けることが必要（物理的に接してなくても）
- ・つながり続けるためには、学ぶ機会、学びの提供が必要（ICT 技術、オンライン、スマホ、タブレット等）。
- ・逆に、コロナ禍によってこれまで対面が必要と思われていたが、そうでもない（オンラインで代替できる）ものも現れてきた。
- ・いろいろな危機が生じることがある。つながる術を複数持っておく必要がある。また、ひとつに偏るとつながれない人も現れる。
- ・コロナ禍においても主体的に考えることで危機は乗り越えられる。
- ・つながりでしか得られない情報もある。どう情報共有していくかは、社会教育としては大きな課題である。
- ・「小さなつながり」「より身近なつながり」の大切さが認識できた。
- ・家族や身近な人とのつながりや時間を持つことができた。
- ・コミュニケーションの仕方も変わる。非言語コミュニケーションに頼りすぎない。
- ・オンラインから始める新しい人間関係の構築は少しハードルが高い。
- ・障害のある方はこれまで以上につながることに苦労がある（介助することは接触することになる。触れないので認識できない。マスクで口元が見えないなど）。

(3) 地域社会を担う人々のつながりづくり事例の調査

- 地域社会における活動の担い手の高齢化、固定化がますます進んでおり、かつてのような諸活動を維持していくことが難しくなっている。
しかしながら、現に地域社会には素晴らしい担い手がいて、地域社会における諸活動が展開されていることに、今一度目を向けておく必要がある。
- 地域社会における活動の担い手は、最初から担い手であった訳ではなく、活動を通して担い手になっている。担い手には、それぞれの活動の楽しさや良さを知るきっかけや、活動への動機づけ、継続していくための手法などがあるものと推測される。
- そこで、山口市社会教育委員会では、「つながり」に着目し、今後の社会教育を効果的に進めるための検討材料として、地域社会の担い手がそれぞれの活動を始めるに至った経緯や活動への思い、つながることの意義、つながりを持続していくための工夫などについての事例の収集を行った。

<地域社会を担う人々のつながりづくり事例の調査について>

調査目的 地域社会や社会教育を担う人材の育成（人づくり）と人と人、世代と世代、組織と組織などをつなぐこと（つながりづくり）について調査するため、担い手の取組についてインタビューを行い、地域社会のための活動を始まるに至った経緯や活動への思い、つながりを持続していくための工夫などを収集することで、つながっていることの意義、つながるためのきっかけやつながりを続けていくための工夫などについて、具体的に明らかにする。

調査時期 令和2年1月中下旬から3月上旬頃

調査の状況 10代から80代までの男女39名

収集事例における性別・年齢の状況

	男	女	計
10代	3	2	5
20代	0	1	1
30代	2	1	3
40代	1	4	5
50代	2	2	4
60代	0	7	7
70代	10	3	13
80代	0	1	1
	18	21	39

※ 調査に際して、社会教育委員による取材に快く御協力いただいた皆様に、心から感謝を申し上げます。

(4)「つながり」に着目した地域社会の課題の整理

- (2)(3)で検討・調査した結果を「つながり」に着目して整理すると、以下のとおりである。

・ 地域社会におけるつながりへの依存度の低下

少子高齢化の進展、人口減少、働き方の変化、リタイヤ年齢の引き上げ、生活様式の多様化等により、地域社会における諸活動のあり方が大きく変化し、その活動の停滞を招いている。

かつては、働く場であり生活の場であった地域社会から、職場につながるの軸が移り、さらに、価値観が多様化し、自身の生活のあり方の追求が進む中で、余暇時間の過ごし方や生活におけるつながりについても地域社会からより広い範囲に拡がり、多様なつながりに軸が移っていくこととなったのではないか。

その結果として、地域社会における人と人との密接なつながりへの依存度が低下してきていると捉えることができる。

・ 生活の場である地域社会におけるつながりの大切さの実感

コロナ禍や近年の豪雨災害等の大規模災害の発生などを契機に、生活面、地域社会におけるつながりの大切さを改めて認識することとなった。オンラインによるつながり方が可能になったとはいえ、生命・身体安全・安心に関することや実生活における危機的状況への対応は、今ここにいる生身の人間同士のつながりによって行っていくことが求められている。

・ つながることを避ける傾向の顕在化と多様なつながりの必要性

近年、核家族化、単身世帯の増加をはじめとする世帯規模の縮小、働き方の変化や生活様式の多様化等に伴う地域社会における日常的ななかかわりやふれあいの機会の減少等から、身近な地域社会におけるつながりを避ける傾向が見られ、結果として、地域における人と人とのつながりの希薄化が進んでいる。

また、1つのつながりに依存しすぎていると、そのつながりが何らかの理由により機能しなくなった時、孤立し不安に苛まれることとなる。軸となるつながりをいくつも持っておいて、多様なつながりを保ちながら生活していくことが必要となるのではないか。

つながりの中で学び合い、高め合うことで、自らの成長の可能性をより高め、より豊かな生活を送っていくことが可能となる。

・ つながり方の多様化と特性の理解

ICT 技術の進歩により、つながり方が多様化することとなった。

オンラインを活用したつながり方は、参集するための距離や時間、会場の収容人数といった物理的な制約を解消し、つながることに関しての可能性を非常に高めることとなった。

しかしながら、オンラインを活用するためには環境整備（ハード面、ソフト面）が必要であり、オンラインを活用したコミュニケーションには、対面におけるコミュニケーションにおいて重要な要素である非言語コミュニケーション（表情や視線、身ぶり、動作、声の質・抑揚、相手との距離、姿勢といった手段を用いたコミュニケーション）が難しいという側面もある。

オンラインによるつながり方が急速に普及したことにより、現実に対面でつながることによる安心感が再認識され、逆に現実に対面でつながることの価値が高まったといえるのかもしれない。

今後は、状況に応じたつながり方の選択が求められてくるとともに、つながり方の特性を理解したコミュニケーションのとり方の選択も求められてくる。

加えて、特に ICT を活用したつながり方への偏重が進むと、デジタル・ディバイド（digital divide：情報格差）が生じるおそれがあることから、情報の受け手を意識した多様な発信方法の選択やデジタル・ディバイド解消に必要な環境整備とリテラシー教育を適切に進めていく必要がある。

5 持続可能な地域社会の形成に向けた社会教育のあり方

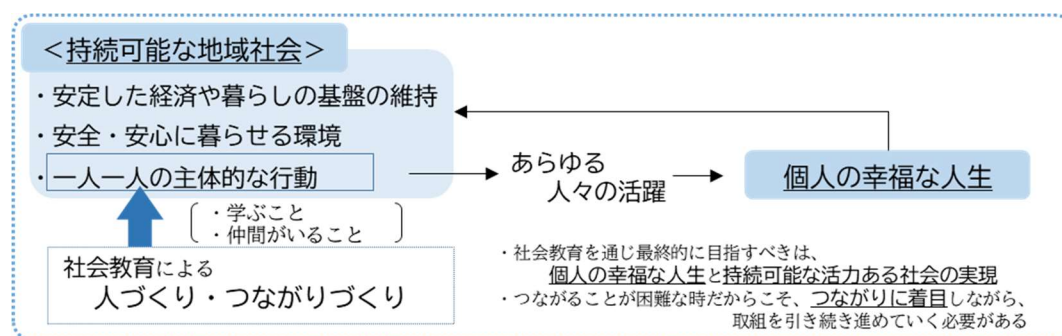
～予測が困難な時代を生きていく中で～

（1）持続可能な地域社会の形成に向けて

- 地域社会は人と人の集まりで形成されており、これまでも地域社会においては、様々な課題を話し合いにより克服してきた。持続可能な地域社会であるためには、安定した経済や暮らしの基盤の維持、人々が安全・安心に暮らせる環境であることはもとより、そこに住むあらゆる人々が活躍し、一人一人がより豊かな人生を送るために主体的な行動ができることが重要となる。

社会教育は、学びを通じて個人の成長を期するとともに、他者と学び合い認め合うことで、自己肯定感や幸福感、つながり意識が醸成され、相互のつながりを形成していくことが特徴であり、社会教育を通じ最終的に目指すべきは、個人の幸福な人生と持続可能な活力ある社会の実現である。

- 一方、ICTの発達、モビリティの拡大、グローバル化等により、社会のあり方や産業構造が大きく変化している。人々の生活は地域社会の中で納まりきらず、空間と時間を越えて拡大の一途を辿っている。現実の生活の場である地域社会と仕事や個人的趣向等の活動の場が乖離し、技術革新により、個人にとっての快適さの追求が進められることが、結果として「つながる」ことを阻害する要因となっている。
- コロナ禍において、私たちの生活・活動は相当制限がかかっていると同時に、当たり前と思うあまり、重要視していなかった「つながり」の大切さを改めて実感することとなった。
- また、これまでは、現実、対面のつながりを前提としていたが、ICT技術の進歩により、多様なつながり方が可能であることをコロナ禍を契機として認識することとなった。実際に会ってつながるべきという考えも、オンラインでつながれるならよいという考えもあり、捉え方は十人十色であり、多様化してきている。
- コロナ禍の時代だからといっても、様々な社会問題（自然災害、医療、福祉など）は待ってくれない。コロナ禍の前と後とに関わらず、時代の変化（感染症、自然災害、過疎化、技術革新、グローバル化）に対応しながら生きていくことが求められている。「新しい生活様式」に対応していくことも、まさに時代の変化に対応していくことである。
- 人はつながりがないことで不安に苛まれ、つながりの中でともに学ぶことで、安心感や高揚感を実感することができる。つながることが困難な時代だからこそ、地域社会におけるつながりづくりに着目しながら、あらゆる人々が主体的に参画し、活躍できるよう、社会教育による、より効果的な人づくり・つながりづくりに向けた取組を引き続き進めていく必要がある。



(2) つながりづくり支援の方向性

- 人は、人とのつながりによって生活を維持するとともに、つながりの場を必要としている。「だれと」、「どこで」、「どのように」つながるかということは、地域活動のあり方にも関わってくる。

ここでは、つながりづくり支援の方向性として、各地域交流センターをつながりづくりの場と想定して、以下の3点の取組の展開について提言したい。

<つながりづくり支援の方向性>

①「ここでつながる」

- ・地域社会において、それぞれの興味関心に基づいてつながり、学び合いを通じて主体的な行動ができるよう、もう一步踏み出すための支援をする。
- ・既存のつながりはもとより、新しい多様なつながりづくりも支援するとともに、地域社会が互いの個性や多様性を認めながら豊かな暮らしを実現できる場、真に自己実現ができる場となるように寛容性を醸成する。

②「どこかにつながる」

- ・ICT技術の活用等による多様なつながり方によるつながりを支援する。
- ・地域を超えたつながりや地域がより開かれ広がっていくことを支援する。

③「大事なものでつながる」

- ・生活、防災、環境、交通、健康、子育て、学校教育、家庭教育、文化の伝承などの今ここにある大事なものでつながるための支援をする。
- ・「大事であること」を共感・共有し、主体的に関わり、行動ができるよう支援をする。

(3) つながりづくり支援のために

- つながりづくり支援の方向性を推進していくための取組例として以下のとおり提言する。なお、各取組例の【】内の数字は、<つながりづくり支援の方向性>と連動している。

・ つながりの大切さの認識の共有 . . . 【①②③】

新型コロナウイルス感染症の影響により、家族や社会のつながりの重要度の意識が高まっている今だからこそ、改めて、つながりの大切さ、地域における個人や団体が互いの個性や多様性を認めながらつながることの良さについて認識の共有が図れるような取組を進める。

・ 地域社会を牽引する担い手とその活動への正しい評価 . . . 【①②③】

地域社会の牽引者である地域活動や社会教育の担い手とその活動について正しく評価することで、現在の担い手のモチベーションを高め、さらなる活躍を促すとともに、地域社会で活躍することの良さを広く伝え、次の担い手の出現を後押しする。

・ 社会教育においても学びを止めない . . . 【①②③】

コロナ禍においても、密閉・密集・密接の3つの密が重ならないように気を付けながら、小さな規模で取組を進めていく。学びを止めず続けることが重要であり、情報交換、学び合いの中で感じる安心感や自己有用感により、つながりを実感できるよう取組を継続する。

・ 楽しさ、面白さ等の視点をもった学びや活動へのきっかけづくり . . . 【①②③】

新たな参画を促すとともに、長く地域活動が続けていくためには、義務感を感じながら取り組むよりは、活動の中に楽しさや面白さ、役に立つ、自己実現ができるといった動機づけが必要となる。こうした視点をもって、学びや活動のきっかけづくりとなる取組が積極的に展開されることが求められる。

・ 「貢献したい」「つながりたい」思いに応えるしくみづくり . . . 【①③】

地域社会に貢献したい、地域社会の中でつながりたいという思いに応えるしくみづくりを進めていく。

特に、地域の活動団体等に所属していない地域住民のニーズに対応するために、地域社会における諸活動を広く知る機会や個人の思いにかなう活動を紹介するブリッジ（橋渡し）の役割を果たす人材が必要となる。

・ ボランティアの養成、ボランティア登録制度の創設 . . . 【①③】

団体に縛られない地域参画、自己実現に向けた学びの機会の確保に向けた取組として、ボランティアの養成を進め、諸活動への参画のきっかけづくりを行うとともに、学びの活用を促すため、地域交流センター等にボランティア登

録制度を設ける。

・ ICT 環境の整備、ICT 技術を活用した学びの実施 . . . 【主に②】

ICT 技術を活用した学びの利点を最大限に生かし、生涯学習・社会教育の取組を充実・発展していくことが求められており、つながりの確保、多様なつながりや地域を越えたつながりの拡大を目指して、地域交流センター等の公共施設に地域住民が活用できる ICT 環境の整備を進めていく必要がある。

こうした整備や ICT 活用能力を高める取組は、デジタル・ディバイドの解消に向けた対応としても求められる。

・ 「つながる場」の設定 . . . 【①】

人が集まる場所を「つながる場」として設定することは極めて重要なことである。地域交流センターが身近でつながりを保てる場となっていくためには、より活用されやすくする取組を進めていくことが望まれる。地域交流センターにおける取組を地域の多くの人に知ってもらうことで利用を促すとともに、個人単位で参加が可能なカフェのような取組の開催、余裕スペースの活用、夜間や休日における学びや集いの場の開催など個人で気軽に利用できるよう取組を行うことで個人と地域社会がつながるきっかけづくりを進めていくことが求められる。

また、集うことでつながり、つながりから新たな取組が生まれていくよう見守り、支援を行っていく必要がある。

こうした取組を推進していくためには、地域における個人や団体が互いの個性や多様性を認める寛容性の醸成を合わせて進めていくことが求められる。

・ 青少年期における地域とのかかわりの習慣化 . . . 【①③】

社会に出たときにどうやって組織の中で合意形成を図りながら課題解決をしていくのか、また、自己実現を図っていくのかということは、青少年期における重要な課題である。そのため、地域社会の中で、単純なボランティア参画に終わらない、青少年が主体的に考え、行動することができるような体験と能力向上の場が継続的に設定されることが望まれる。こうした体験を通じて、青少年の主体性が養われ、今後の地域への主体的な参画へとつながる。

・ 年代を問わず充実した暮らしができる環境づくり . . . 【①③】

生活の中で自分が認められる場があるときに、人は希望をもち、活力を養っていくことができる。そうした場が地域社会の中にあれば、人の心は自然と地域社会に向くこととなる。つながりの中で自己の存在を確かめることができる

場があることで、孤立を防ぎ、アクティブに生きることにつながる。

・ 地域住民にとって大事なものを取り上げた学び（学習と対話） . . . 【③】

生活、防災、環境、交通、健康、子育て、学校教育、家庭教育、文化の伝承などについては、地域社会の中にある「今ここにある大事なもの」である。したがって、第一義的には「今ここにいる人」で担っていくことが求められる。

「今ここにある大事なもの」の現状をまずは地域住民が知ることが第一であり、こうした取組は切れ目なく行っていく必要がある。

したがって、地域住民にとって大事なものをあらゆる年代において講座等で学ぶ機会が設けられることが望まれる。対話をしながら、「今ここにある大事なもの」を軸としたつながりづくりを進めていくことで、地域活動への主体的な参画意識の向上や地域への帰属意識の向上を図ることができる。

・ 地域社会における取組のオープン化と外部からの参画 . . . 【①②③】

地域社会における取組は地域住民によって担われることが一つのあり方である一方で、関係人口と呼ばれる地域外の人材が地域づくりの担い手となることも期待されている。

地域を地域の中に閉じず、より地域が開かれ、広がりを持っていくためには、隣接地域等とのつながりを持っていくことや地域社会における取組を知ってもらい、オープン化していくことにより、地域外の人材の参画を促していくことが重要である。

・ 包摂的な社会を実現する取組の推進 . . . 【①②③】

持続可能な地域社会を形成していくためには、全ての人が生涯にわたって主体的に学び続けることができる環境づくりが重要であり、共に学び合う場を社会教育を通じて実現していくことが求められる。

包摂的な社会を実現していくためにも、社会教育における学習機会の拡充や市民一人一人が排除されたり差別されたりすることなく、地域の一員として認められ、それぞれの個性を生かして地域社会とつながりを持つことができる場、活躍できる場を設けていくことが必要となる。

6 おわりに

持続可能な地域社会を形成していくため、人と人、地域と地域などのつながりに着目しながら社会教育のあり方についての検討を進めてきた。しかし、新型コ

コロナウイルス感染症拡大に伴い、本会議の協議が約5か月間中断することとなった。そこで、新型コロナウイルス感染症が人と人、地域と地域などのつながりに大きな影響を与えたのではないかとの推測に立って、新型コロナウイルス感染症を踏まえた追加の検討も行った。そのため、検討作業は新たに多くの課題を抱えて進められたが、ようやく今回の提言をまとめることができた。

しかしながら、時代は目まぐるしく変化しており、時代の流れに沿って常に社会教育のあり方について検討し、さらなる取組を進めることが望まれる。不断の考究と実践が、まさに持続可能な地域社会を形成していく上で求められている。

加えて、山口市社会教育委員会議のそれぞれの社会教育委員が社会教育活動等に積極的に取り組み、時代の流れや地域の状況を的確に把握することが大切であると考えている。

○用語について

SDGs

SDGs (Sustainable Development Goals: 持続可能な開発目標) は、「誰一人取り残さない (leave no one behind)」持続可能でよりよい社会の実現を目指す世界共通の目標のこと。2015 年の国連サミットにおいて全ての加盟国が合意した「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」の中で掲げられた。2030 年を達成年限とし、17 のゴールと 169 のターゲットから構成されている。すべての国が行動し、行政、経済界、市民社会といったセクターが単独で取り組むことにとどまらず、社会全体が目指す共通の理想に向けて、連携して行動していくことが求められている。

地域包括ケアシステム

高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援の目的のもとで、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができることを目指した、地域の包括的な支援・サービス提供体制のこと。団塊の世代が 75 歳以上となる 2025 年（令和 7 年）を目途に構築を推進している（厚生労働省ホームページより）。

地域共生社会

制度・分野ごとの『縦割り』や「支え手」「受け手」という関係を超えて、地域住民や地域の多様な主体が『我が事』として参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えて『丸ごと』つながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会のこと（厚生労働省ホームページより）。

地域運営組織

地域の生活や暮らしを守るため、地域で暮らす人々が中心となって形成され、地域内の様々な関係主体が参加する協議組織が定めた地域経営の指針に基づき、地域課題の解決に向けた取り組みを持続的に実践する組織のこと（総務省「暮らしを支える地域運営組織に関する調査研究事業報告書」より）。

「小さな拠点」づくり

小学校区など、複数の集落が集まる基礎的な生活圏の中で、分散している様々な生活サービスや地域活動の場などを「合わせ技」でつなぎ、人やモノ、サービスの循環を図ることで、生活を支える新しい地域運営の仕組みをつくろうとする取組のこと（国土交通省ホームページより）。

Society5.0

サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会（Society）のこと。

狩猟社会（Society 1.0）、農耕社会（Society 2.0）、工業社会（Society 3.0）、情報社会（Society 4.0）に続く、新たな社会を指すもので、第5期科学技術基本計画において我が国が目指すべき未来社会の姿として初めて提唱された（内閣府ホームページより）。

デジタル・ディバイド

インターネットやパソコン等の情報通信技術を利用できる者と利用できない者との間に生じる格差のことをいう。具体的には、インターネットやブロードバンド等の利用可能性に関する国内地域格差を示す「地域間デジタル・ディバイド」、身体的・社会的条件（性別、年齢、学歴の有無等）の相違に伴う ICT の利用格差を示す「個人間・集団間デジタル・ディバイド」、インターネットやブロードバンド等の利用可能性に関する国際間格差を示す「国際間デジタル・ディバイド」等の観点で論じられることが多い（平成 23 年版情報通信白書より）。

○提言に関する山口市社会教育委員会議の開催状況

第7期

第3回会議	令和元年8月2日(金) 午前10時から	会議の今後の進め方について
第4回会議	令和元年9月27日(金) 午前10時から	提言テーマの決定
第5回会議	令和元年11月26日(火) 午前10時から	社会教育や地域社会の現状、課題の整理
第6回会議	令和2年1月14日(火) 午前10時から	つながりづくり事例の調査について
第7回会議	令和2年3月11日(水) 午後1時30分から	<新型コロナウイルス感染症感染拡大 防止のため中止>
第8回会議	令和2年7月6日(月) 午前10時から	提言に向けた取組の振り返りと新型コロナウイルス感染症の影響を踏まえた今後の方向性について
第9回会議	令和2年8月31日(月) 午後1時から	提言の方向性について つながりづくり事例の調査結果の共有

第8期

第1回会議	令和2年10月30日(金) 午前10時から	提言骨子案の協議
第2回会議	令和2年12月15日(金) 午前10時から	提言骨子案の確認 つながりづくり事例の調査について
第3回会議	令和3年2月4日(木) 午前10時から	提言案の協議
第4回会議	令和3年3月1日(月) 午前10時から	提言最終案の確認
	令和3年3月12日(金) 午前10時から	提言書手交

○山口市社会教育委員名簿（50 音順）

第7期 任期：平成30年10月1日から令和2年9月30日

令和2年9月30日現在

No.	氏 名	所属・役職	備考
1	浅原 淳子	山口市家庭教育アドバイザー、民生委員・児童委員	
2	井上 信人	元 人権擁護委員	
3	岡本 栄	税理士、山口市消費生活推進員	
4	金子 勲	公募委員	
5	木橋 悦二	山口市青少年健全育成市民会議会長	副議長
6	幸坂 美彦	防災・環境アドバイザー	
7	縄中 宏明	阿知須小・中学校学校運営協議会会長等	
8	南波 敏子	小郡地域交流センター自主教室代表	
9	原田 洋子	山口市立図書館協議会委員、あいお文化倶楽部副会長	議長
10	福田 敏子	山口市子ども会育成連絡協議会	
11	藤井 智佳子	特定非営利活動法人あっと代表理事	
12	山本 純也	山口県央商工会阿東支所長	
13	山本 優	山口市立阿東東中学校校長	令和元年5月30日委嘱
14	吉田 芳子	山口市連合婦人会山口支部副会長	
15	吉富 崇子	山口県地域消費者団体連絡協議会会長	

第8期 任期：令和2年10月1日から令和4年9月30日

令和3年3月1日現在

No.	氏 名	所属・役職	備考
1	浅原 淳子	山口市家庭教育アドバイザー、民生委員・児童委員	
2	明日香 健輔	公募委員	
3	井上 信人	元 人権擁護委員	
4	岡本 栄	税理士、山口市消費生活推進員	
5	木橋 悦二	山口市青少年健全育成市民会議会長	副議長
6	幸坂 美彦	防災・環境アドバイザー	
7	縄中 宏明	阿知須小・中学校学校運営協議会会長等	
8	西 公男	公募委員	
9	原田 洋子	山口市立図書館協議会委員、あいお文化倶楽部副会長	議長
10	福田 敏子	山口市子ども会育成連絡協議会	
11	藤井 智佳子	特定非営利活動法人あっと代表理事	
12	山本 純也	山口県央商工会阿東支所長	
13	山本 優	山口市立阿東東中学校校長	
14	吉田 芳子	山口市連合婦人会山口支部副会長	
15	吉富 崇子	山口県地域消費者団体連絡協議会会長	

○地域社会を担う人々のつながりづくり事例の調査について

調 査 目 的 地域社会や社会教育を担う人材の育成（人づくり）と人と人、世代と世代、組織と組織などをつなぐこと（つながりづくり）について調査するため、担い手の取組についてインタビューを行い、地域社会のための活動を始まるに至った経緯や活動への思い、つながりを持続していくための工夫などを収集することで、つながっていることの意義、つながるためのきっかけやつながりを続けていくための工夫などについて、具体的に明らかにする。

調 査 時 期 令和2年1月中下旬から3月上旬頃

調査の状況 10代から80代の男女39名

収集事例における性別・年齢の状況

	男	女	計
10代	3	2	5
20代	0	1	1
30代	2	1	3
40代	1	4	5
50代	2	2	4
60代	0	7	7
70代	10	3	13
80代	0	1	1
	18	21	39

※ 調査に際して、社会教育委員による取材に快く御協力いただいた皆様に、心から感謝を申し上げます。

インタビュー対象	地域	大内	年代	60	性別	女
	活動、団体名	自治会による子ども会活動			役職等	
	活動内容	地域の子供たちを集めて、夏休み、冬休みに勉強会や子ども会活動支援				
・きっかけ	・単位子ども会が全く活動しなくなったため、自治会の将来が案じられた。					
・やりがい	・子供たちの反応が早い。勉強だけでなく、カレーづくり、ごはん炊き、竹トンボ、竹馬等々、昔の遊びを承継					
・つながりの実感	・子供たちとの会話が増えた。					
・しかけ（工夫）	・子ども会を自治会組織内に取り込んだ。独立した会から自治会の一部組織にすることで、カネ、ヒト、モノが出しやすくなった。					
・課題や問題点と 対応策						

インタビュー対象	地域	大内	年代	70	性別	男
	活動、団体名	青少年健全育成協議会			役職等	
	活動内容	中学校近くで朝の立哨を学校関係者とともにやっている。				
・きっかけ	・子供達の健全育成を目指そうとする地域住民の意識付け					
・やりがい	・朝のあいさつ運動を通じて、地域の人との接点が増え、お互いに声をかけあっている。					
・つながりの実感	・個々の面識はなくても「おはようございます」「こんにちは」と言ってくれる。					
・しかけ（工夫）	・初めはあいさつする勇気がない子供がいてもこちらから声をかけることで自然と反応する。					
・課題や問題点と 対応策	・後継者不足（朝、通学時にこの活動ができる人がいない。）					

インタビュー対象	地域	大内	年代	70	性別	男
	活動、団体名	自治会、老人クラブ			役職等	
	活動内容	児童生徒の登校時、下校時の見守り活動				
・きっかけ	・老人クラブの先輩から誘われた。 子供達との下校時のあいさつが清々しい。					
・やりがい	・子供達はもとより、保護者からの積極的なあいさつ					
・つながりの実感	・買い物等で会った人達から声をかけられること ・学校側もいろいろと配慮してくれる（感謝の集いなど）					
・しかけ（工夫）	・気軽にあいさつをし合うこと					
・課題や問題点と 対応策	・後継者が少ない。 高齢を理由に活動を辞する方がいる一方で、参加希望者がいない。					

インタビュー対象	地域	平川	年代	50	性別	男
	活動、団体名	自主防災組織			役職等	防災委員
	活動内容	・ 平常時の自主防災組織の指導助言				
・ きっかけ	・ 住んでいる地元が大雨により被災 床下浸水や床上浸水があり、また近隣の市での被災復興の支援					
・ やりがい	・ 想定による活動なので、結果が見えないところで、どのように住民に知らせめるか。意識させるか。					
・ つながりの実感	・ 地縁で「あの人がやるなら私もやろう」と参加する者が多い。 ・ お付き合いのある者がつながりが強い、行動も一緒にされる。					
・ しかけ（工夫）	・ 機会を見つけては、つながりの大事さを説いている。 ・ つながりができるような会合等を企画してしている（年齢に関係なく触れ合える行事など）。					
・ 課題や問題点と 対応策	・ お互いがなれるまでに、時間がかかる。 ・ 若い方は溶け込んだら進んで参加してくれる。 ・ 高齢者等は、理由をつけて参加しない。					

インタビュー対象	地域	大歳	年代	70	性別	男
	活動、団体名	自治会			役職等	会長
	活動内容	自治会活動				
・きっかけ	・新しい団地ができて、家を建て数件で自治会の班を作ることになり、入居済みの数件で話し合いの場をもって、つながりが必要と感じた。					
・やりがい	・班長・自治会長などの役をしていて、皆さんの「ありがとう」のことばにやりがいを感じる。					
・つながりの実感	・皆さんが協力してくれることにつながりの実感がある。 ・住んでる住民全員が、仲良く元気なあいさつが飛び交うかというと、そうでもない。そんなときは、どうつながりを作るかと思案する。					
・しかけ（工夫）	・団地内で一緒にできる行事などを組んでみる。 ・年代が多岐にわたる為に、年代に合わせて企画しないといけない。					
・課題や問題点と対応策	・生まれ育った場所や環境も違うし、年代が多岐にわたるとなかなかまとまらないことが多いので、子どもたちには極力声掛けをして見守りをしている。 ・団地内のことに無関心、自分たちの生活に精一杯、習慣にとらわれないなどから、ファミリーでの活動が多く、つながりづくりはむずかしい。					

インタビュー対象	地域	大歳	年代	70	性別	男
	活動、団体名	見守り隊			役職等	
	活動内容	地域づくり協議会の安心・安全部会に所属 子どもたちの見守り、また、「わんわんパトロール」による環境美化のための活動を継続。夏休みのラジオ体操にも積極的に参加				
・きっかけ	・定年後、地域交流センターのポスターを見て、「見守り隊」に参加（安心・安全部会入会）。孫を幼稚園に送迎時等、自動車の安全運転を強く願い、小学校入学時より「見守り隊」活動（登下校時の安全・安心、交通事故防止の活動）に参加（見守り活動～あいさつ～声かけ～地域住民への協力呼びかけ）。 さらに、犬を連れての「わんわんパトロール」を実施。この活動を通して危険箇所の点検、通報、要請へとつながったこと。また、ゴミ拾いなど環境美化にもつながった。					
・やりがい	・町内会活動や安心・安全部会の活動を通じ、地域の方々より緊密に声かけ、あいさつを交わし、安心に暮らせる地域になるように、活動を続けていること。 このことに対して地域の人々より感謝の言葉をいただけることが継続することにつながっている。					
・つながりの実感	・団地に暮らしているが、人とのつながりが広がり、密になり、暮らしやすさに結びついている。					
・しかけ（工夫）	・まず第一に、健康であること。出来る範囲ですること。 ・高齢化が進み、地域でふれあう機会をより多く企画すること ・老人パワーの活動の場の創出（子どもたちとのかかわりがあるとよい）					
・課題や問題点と対応策	・交通量が増え、渋滞が発生しやすい。信号無視、スピード超過など地域内の交通安全が心配である。					

インタビュー対象	地域	小郡	年代	50	性別	女
	活動、団体名	こども食堂			役職等	実行委員
	活動内容	毎月1回、日曜日に公共施設で無料の食堂を開催				
・きっかけ	・PTAつながりの知人から誘われ、こども食堂の立ち上げに携わり、実行委員として現在に至る。知人とは、地域の子育てに関わり、みんなで子供を見守ることが大切ではないかと常日頃から話してたところだった。小郡みんな食堂は、老若男女、だれでも利用できる場所であり、私は主旨に賛同した。					
・やりがい	・やりがいはとてもある。ボランティア同士の話しも有意義である。 人々にとって、子どもにとって、家族や親戚以外とのつながりはとても大事であり、おせっかいできることに喜びがある（リピーターがとて多い）。 ・来会された大人、子どもからの楽しかったとかおいしかったの言葉はもちろん励まされて有難いが、子育て中の親の休息の場や高齢者には交流の場になっているようで、地域での必要性を感じている。					
・つながりの実感	・ボランティア参加者は初対面の方も多く、地域ネットワークが広がっていると思う。また、食材などの無償提供をわざわざ連絡してくださる方もいて、つながりを実感し、感謝しきれない。もちろん来会者と買い物などで出会うこともあり、うれしい（あいさつできるので）。さらには、多種多様な団体から視察・見学もある。 ・地域の問題にみんなが積極的に取り組み、共有する機会が持てている。					
・しかけ（工夫）	・開催案内は、地域内の小中学校に毎回配布。幼保にも配布している。近隣の地域にも配布したことがある。地域の回覧板でも回してもらっている。 ・食堂に合わせて、自習学習会、読み聞かせを行ったり、食事メニューをバリエーティー豊かにすることもある。 ・エゴにも力を入れていて、使い捨て容器ではない。カレーなどは来会者自らが古タオル切れで皿を拭いてもらったりした。 ・家庭ではできないことを知る機会を作るしかけ ・ボランティアは飛び入り歓迎で、無理な手伝いはしないでもらいたいと考えている。					
・課題や問題点と対応策	・毎回150人前後の来会があり、調理等ボランティアの作れる量の限界ギリギリである。また、席が足りなくなって、待ってもらうこともある。 ・ボランティアの確保、資金の調達、場所の確保が気になる。そのため、小学校区で別々に行いたい、ボランティアと場所と日時について目途が立たない。					

インタビュー対象	地域	小郡	年代	70	性別	女
	活動、団体名	老人クラブ見守り隊			役職等	
	活動内容	2015年から小学校の登下校の見守りをしている。				
・きっかけ	・主人が小学校の見守り活動をしており、地区では一人だったので、私も協力するようになった。					
・やりがい	・見守り隊は海の灯台と同じだと思っている。緑のジャンパーを児童が見て、安心できる存在になりたい。 ・小学生の笑顔に私が元気をいただいている。					
・つながりの実感	・下校時に駅前に立っていますが、多くの人々にお会いできるので、言葉がけをしながら輪を広げたいと思っている。					
・しかけ（工夫）	・最近は交通・不審者対応など気を使うことが多いですが、児童から元気のパワーをいただき、教えられることも多いので、人生100年時代、老人パワーに活力をと思う。					
・課題や問題点と対応策	・一歩ずつ数ミリでも地道に活動していくことが大事だと思う。					

インタビュー対象	地域	秋穂	年代	60	性別	女性
	活動、団体名	布絵本の会			役職等	
	活動内容	毎月一回の定例会をメインに有志が布絵本、タペストリーなどを制作、図書館に寄託、お話の部屋での利用に供するほか、館内に展示（開館前の制作分13冊を含め37冊及び壁面飾り、毎月のおはなし会案内）している。				
・きっかけ	・秋穂図書館開館要望活動の一環で、伊万里市民図書館を見学した布絵本や壁面飾りのタペストリー制作グループの存在を知った。 ・「図書館と友だちの会・秋穂」が開館前にシリーズで実施した「あれこれシリーズ」の中で講師として招いた東京布絵本の会の渡辺順子さんから指導を受ける機会があった ・会が発足後に参加した人は友人誘われたこと、図書館まつりでのワークショップ参加など。					
・やりがい	・作品が仕上がった時の充実感 ・作品に触れて喜んでもらえた時					
・つながりの実感	・共通の趣味 ・場を共有している					
・しかけ（工夫）	・無理をしない					
・課題や問題点と対応策	・新しい仲間をどう誘うか					

インタビュー対象	地域	秋穂	年代	70	性別	男性
	活動、団体名	中学校学校運営協議会			役職等	委員
	活動内容	協議会の会議に参加 三校合同の挨拶運動に参加 機会があれば学校行事に参加				
・きっかけ	・地域協育ネット協議会に保護司として参加していたところ、中学校長からの依頼で委員となった					
・やりがい	・中学校が明るくなってきたと思える ・生徒の顔を覚えられる					
・つながりの実感	・同じ集落内のこどもと仲良くなれた（挨拶・会話）					
・しかけ（工夫）	・キャリア教育、防災教育の提案をしている 1年生の授業（グループワーク）に参加する機会があったが、しっかりした考えを持ち、発言力があって頼もしく感じた					
・課題や問題点と対応策	・特になし					

インタビュー対象	地域	秋穂	年代	80	性別	女性
	活動、団体名	図書館と友だちの会・秋穂			役職等	代表
	活動内容	秋穂図書館の利活用促進のための活動、協力、提案、支援など 平成18年夏に当会発足(開館2年前)				
・きっかけ	・平成17年度の合併により、秋穂地区住民がかねてより要望していた新山口市発足後の秋穂図書館設置が決定された。しかし従来多くの地域住民にとっては無縁のものと思われていた「図書館」の利活用についての情報提供の必要性があった。					
・やりがい	・様々な講座等を企画、参加者の関心を高めることができたと思われ、開館後の10年間一定ペースでの入館者を迎えている。					
・つながりの実感	・読み聞かせ、布絵本制作、イベントのサポートなど、各自のできることを通じてグループ内で、また、利用者との交流ができる。					
・しかけ（工夫）	多くの利用者への広報(活動の紹介)					
・課題や問題点と対応策	広報媒体の有効性					

インタビュー対象	地域	秋穂	年代	中心世代は60代周り	性別	女性
	活動、団体名	読み聞かせの会			役職等	会員
	活動内容	小学校や図書館、幼稚園、コミュニティセンターなどでの読み聞かせ				
・きっかけ	・こども読書年(2000年)の活動					
・やりがい	・子どもたちが熱心に聞いてくれる ・こどもたちと顔なじみになれる					
・つながりの実感	・街中で出会った折などに声をかけてくれる					
・しかけ（工夫）	・選書（特に複数人で行う場合）					
・課題や問題点と 対応策	・新しい仲間をどう増やすか					

インタビュー対象	地域	徳地	年代	70	性別	男
	活動、団体名	地域振興の団体			役職等	会長
	活動内容	・ 児童委員・民生委員 ・ 地区民児協会長 ・ 地域の公共施設運営協議会副会長				
・ きっかけ	・ 35歳の時、地域振興の団体が発足されて、初代の会長に推薦された。 企業人として地域おこしに力を入れる。大変苦労した（当時は地域振興の機運が全くなかった時代）。					
・ やりがい	・ 感謝の言葉をかけられた時（現在は無関心層が多くて、あまりない） ・ あらゆる階層の人とつながりができたこと。現在もつながっている。 ・ 参加者が徐々に増える時 ・ 他人より良き褒め言が自然に伝わってきたとき ・ 手伝い者（協力者）が徐々に増える時					
・ つながりの実感	・ 参加者が徐々に増える時 ・ 他人より良き褒め言が自然に伝わってきたとき					
・ しかけ（工夫）	（今まで経験して感じること） ・ 何事も絶対に無理をしない。焦らないこと（他人に分かったらだめ） ・ 聞き上手であること ・ 誠実な関心を寄せること（誠意、熱意） ・ 笑顔で接すること ・ 名前を忘れないこと ・ 批判、非難をしないこと ・ 苦情を言わないこと ・ 相手の関心を見抜いて、議題にすること					
・ 課題や問題点と 対応策	・ 現状どの地域に行っても問題点は、地域振興項目は多種あっても、そこで活動する人は、どの項目も、同じ人物（仲間）という時代である。 ・ 対応策は、「しかけ（工夫）」を十分認識されることが大切と思われる。					

インタビュー対象	地域	徳地	年代	70	性別	男
	活動、団体名	元人権擁護委員			役職等	なし
	活動内容	・ 6年間人権擁護委員を務める ・ 中学校学校運営協議会委員を務める				
・ きっかけ	・ 退職後の生活は、社会や人から一線をおいて、縛られずに自由に送りたい。そんな気持ちで生活を送っている中、自分の人生を問いかけることもあり、今まで身につけた知識・知恵・技術や自分の良さを生かしたいという気持ちも芽生えてきた。そうしたタイミングに地元の先輩から声をかけられて引き受けるに至った。					
・ やりがい	・ 生活に変化（緊張や学習する機会が増えるなど）や社会に関わっていることから充実感や満足感を感じる。 ・ 社会（学校や地域）の現状や課題を知り、また、いろんな人の考え方や人間性とふれ合うことができ、新しい世界が広がってくる。 ・ 自分の考えや行動が受け入れられることや、前向きに行動できていることに誇りが持てる。 ・ 人とのつながりが実感でき、心の安定につながっている。					
・ つながりの実感	・ 1つのつながりが次へのつながりを生み、ネットワークが広がっていくこと、さらにはこの人間関係の広がりが生活や心の安定感に繋がること ・ 困窮しているときやいざというときに相談したり、頼ることができること ・ 人の温かさや優しさ、笑顔や励ましにふれること					
・ しかけ（工夫）	・ コミュニケーションの場を増やすこと ・ 聞き上手になること ・ 自然で温かいつながりを意識すること ・ 相手の気持ちや立場を感じ取るようにすること					
・ 課題や問題点と 対応策	<つながりがあれば、危機意識が共有できれば乗り越えられる> ・ 地元住民のつながり（自然で格差も乗り越えたつながり）を深める。 ・ 喫緊の課題の共有					

	地域	徳地	年代	60	性別	女
インタビュー対象	活動、団体名	・母親クラブ（代表） ・地域づくり協議会（役員） ・百歳いきいき体操（世話人）・読み聞かせの会（会員）			役職等	
	活動内容	・母親クラブでは、代表として地域の子どもたちとのふれあいや他団体との研修や会員相互の研修を行っている。 ・地域づくり協議会の役員として、様々なイベントを企画し、運営している。				
・きっかけ	・母親クラブは、会長の引き受け手がなく、どうしても会長をやってほしいと頼まれて引き受け現在に至っている。 ・地域づくり協議会は、大字単位で誰か代表を出さなければならず、これも頼まれて引き受けることになった。 ・読み聞かせの会は、子供たちや地域の人とのふれあいが好きで、読み聞かせをしたいと思い、自分から入会した。 ・いきいき百歳体操は、たまたまチャレンジデーに近所のおばさん2人をお連れしたのがきっかけで、そのままお世話することになった。 ・それ以外にもレクリエーションのボランティアもしていて、忙しい日々を送っていてやりくりも大変である。					
・やりがい	・「あなたの顔を見たら元気が出る。」「あなたに会えると元気をもらえる。」とか、大きなイベントが終わった時に、「楽しかったよ。」「良かったよ。」と言ってもらえて大変うれしい。また、読み聞かせでも、「あなたの話が一番よく聞こえるよ。」と言われ、満足感を感じた。					
・つながりの実感	・それぞれが違う団体での活動ではあるが、これらの活動の中で出会う人々との交流が様々なところで生かされていることを痛感している。どんな人に対しても、いつも笑顔で接していくことによって、信頼関係も生まれているという利点もたくさんあり、ありがたいことだと思う。					
・しかけ（工夫）	・ついつい断ることができず、いろいろなことを抱えているが、人に頼られるということはありがたいことだと思う、できることはできるだけ挑戦したいと思う。					
・課題や問題点と対応策	・若い人にもさまざまなことに挑戦してほしい。そうするためには何をどうしたらよいか手探りの状態である。 ・これからの地域を活性化させるべく知恵を絞ってもっとたくさんのいろんな人を呼び込み、未来につなげたい。					

インタビュー対象	地域	徳地	年代	10	性別	女
	活動、団体名	国立山口徳地青少年自然の家 ボランティア			役職等	
	活動内容	・国立山口徳地青少年自然の家の教育事業における「子どもに関わるボランティア」				
・きっかけ	・山口大学教育学部主催の「ちゃぶ台林間学校」に、子どもの頃参加した。そこで出会った大学生にあこがれを抱き、現在に至る。 また、将来は養護教諭を目指しており、継続的に子どもと関わる機会を得たかったため。					
・やりがい	・子どもが見せてくれる笑顔に出会うとき、やりがいを感じる。正直なところ、私が子どもの頃に、あこがれを抱いた大学生の姿とは程遠いし、一緒に活動している仲間とのスキルの差も感じる。今は 子どもが安心して挑戦できる場の提供を目指している。					
・つながりの実感	・仲間と活動することで、ひとりでは気づけなかった視点が見つかったり、視野が広がったり、やってみようという気持ちになれていると考える。子どもたちのおかげで、自身の価値観が広がっている。また、自己肯定感も上がっていると思う。					
・しかけ（工夫）	・長期の休みを中心に活動している。職員の方が学校まで送迎してくださることもあり、土日を含めた休日のボランティアに参加している。					
・課題や問題点と対応策	・私は、運動があまり得意ではないのだが、キャンプのプログラムによっては、運動強度がとても高いものが組み込まれている。周りが成功していく中で、自分だけができなかったりして、チームに負担をかけていると感じることが多い。だからこそ、先入観を持たずに前向きに挑戦するようにしている。					

インタビュー対象	地域	徳地	年代	10	性別	女
	活動、団体名	国立山口徳地青少年自然の家 ボランティア			役職等	
	活動内容	・国立山口徳地青少年自然の家の教育事業における「子どもに関わるボランティア」				
・きっかけ	・小中学校の時に参加した教育事業で、一緒だったボランティアのお兄さんやお姉さんにあこがれたから。 ・尊敬している先輩がいたから					
・やりがい	・将来やりたいことがなかったが、子どもや教育に関わる職業に就こうと思えるようになった。					
・つながりの実感	・他学部、他学年、他大学の友達ができ、自己の価値観が広がった。多様な人との関わり方が学べている。					
・しかけ（工夫）	・ボランティア活動を「したい」と思った時にしか行かない。 「しなくてはいけない」という使命感だけでは参加しない。自分のやりたいことを優先させることで持続できている。					
・課題や問題点と対応策	・少しでも、やりたいという気持ちのある子どもたちをどのようにして引き込むか。ボランティア活動の楽しさとやりがいを伝えたい。					

インタビュー対象	地域	徳地	年代	10	性別	男
	活動、団体名	国立山口徳地青少年自然の家 ボランティア			役職等	
	活動内容	・国立山口徳地青少年自然の家の教育事業における「子どもに関わるボランティア」				
・きっかけ	・大学生になったら、自然の中でキャンプをしたいと考えていたから					
・やりがい	・いざやってみると、子どもたちに関わることが多くて、本来の自分の目的とはかけ離れた活動内容であった。しかし、子どもと遊ぶのは好きだったし、今は、子どもが活動を通して、楽しい思い出を作ることに関与できることにやりがいを感じている。					
・つながりの実感	・「また、ボランティアに来てね」と言われたとき ・再度子どもに会ったときに、名前を覚えてくれていたとき					
・しかけ（工夫）	・書物やインターネットにより、子どもとの関わり方についての知見を深めている。					
・課題や問題点と対応策	・最初のあいさつに時に笑顔になれない。普段の生活の中で、あいさつできるように実践を心がけている。					

インタビュー対象	地域	徳地	年代	10	性別	男
	活動、団体名	国立山口徳地青少年自然の家 ボランティア			役職等	
	活動内容	・国立山口徳地青少年自然の家の教育事業における「子どもに関わるボランティア」				
・きっかけ	・はじめ、先輩に声をかけられて、子どもとのふれあいを始めたが、そこで、子どもたちとの関わる難しさ、楽しさを知り、本格的に活動に参加し始めた。					
・やりがい	・予想外の考え方を子どもから教えられるという体験 ・子どもたちの喜んだ顔を見ること ・自分自身が変わってきた。どんな人にもポジティブに声かけができるようになった。					
・つながりの実感	・先輩ボランティアにいろいろなことを教えてもらえたこと。 ・同じ学年のボランティアとは意見を交換しあい、成長できた。					
・しかけ（工夫）	・授業がない日にしか行かない。バスを利用して来ている。 ・ボランティアと一緒にしてくれる友人を作る。また、交友を深める。					
・課題や問題点と対応策	・同じような事業が何回も続くとマンネリ化してしまう。 ・毎回、違う工夫をしながら進めていく。					

インタビュー対象	地域	徳地	年代	10	性別	男
	活動、団体名	国立山口徳地青少年自然の家 ボランティア			役職等	
	活動内容	・国立山口徳地青少年自然の家の教育事業における「子どもに関わるボランティア」				
・きっかけ	・子どもに関わってみたくてボランティアを始めてみようと思った。将来は、学校の先生を目指しているが、自分は、親戚の中で一番年下であり、年下との関わりがほとんどなかったため、学ぶ必要を感じた。					
・やりがい	・活動が終わって、帰る直前に手紙を渡してくれる子がいたり、振り返りシートに「楽しかった」などと書いている子がいたりすると、やって良かったなと思う。班を支えるような存在であるため、今までは自分のことしか考えられなかったけれど、今では、少しずつ周りのことが見えるようになってきた。					
・つながりの実感	・ボランティアのメンバー自体が、山口大学、山口県立大学などであり、いろいろな大学生と関わって楽しい。職員の方々とも関わることができ、子どもたちとの接し方など沢山のことを学んでいる。					
・しかけ（工夫）	・長期休暇や土日を使って、学業に支障が出ないように配慮している。					
・課題や問題点と対応策	・体調の管理が一番の課題です。テスト勉強等で徹夜し続けたりしたあとで、ボランティアに出ると事業の実施中に眠くなったりする。					

インタビュー対象	地域	徳地	年代	30	性別	男
	活動、団体名	国立山口徳地青少年自然の家 ボランティア			役職等	
	活動内容	・国立山口徳地青少年自然の家の教育事業における「子どもに関わるボランティア」				
・きっかけ	・「子ども夢基金」を利用して、自主企画を行ったときに、子どもとの関わり方をもっと知りたいと思った。 ・尊敬できる先輩が、活動のことを楽しそうに語っていたから					
・やりがい	・子どもの笑顔を見たとき、とても嬉しくなる。 ・自分の思いや気持ちの大切さを知ることができた。 ・同じ思いを持った仲間と活動し、語り合える喜びを感じたとき					
・つながりの実感	・全国の教育施設で活動しているボランティアと、子どもとの関わり方や悩みなどを相談しあえるとき、「良かった」と感じる。					
・しかけ（工夫）	・「やりたい、したい、行きたい」と思った時に行く！ ・ボランティアで悩んだときは、ボランティア活動で解決する(職員さんに相談するとか・・・)。					
・課題や問題点と 対応策	・後輩たちに、自分の経験や活動の面白さ、楽しさを伝えていく。そのために、活動で感じたことをアドバイスなどを通してどんどん伝えるようにしている。					

インタビュー対象	地域	阿東	年代	30	性別	女
	活動、団体名	山口市立中学校			役職等	教諭
	活動内容	文化祭の企画の一つとして地域を巻き込んだの「ギネス記録」に挑戦した。				
・きっかけ	文化祭で地域を巻き込んだ企画を教職員で話し合い、阿東地域は高齢者が多いのが問題、ではなく、活用できないか、と考え、ギネス記録の中に折り鶴をつなげた記録があることに気づき、高齢者の生きがいになるかもと、スタートした。					
・やりがい	地域の高齢者が、子供のためにと頑張ってください姿を見て、とてもうれしかった。					
・つながりの実感	面識のない方まで、わざわざ学校に折り鶴を持参されたり、地域での会話の中でも話が出ていることなどを知った時。					
・しかけ（工夫）	県の金融広報委員会の研究指定を受け、架空の「つる式株式会社」を設立し、補助金と企画に賛同した教職員から原資を募り、資金に充てた。折り鶴の他にも、食に関する観光ビデオを作成したり、幅広く企画を進め、後日県でも発表した。					
・課題や問題点と対応策	地域に向けて、企画の終了を幅広く伝える手段が見つからなかったこと。					

インタビュー対象	地域	阿東	年代	40	性別	男
	活動、団体名	個人			役職等	個人
	活動内容	小学校のPTA会長をはじめ、中学校や高校の農業宿泊体験学習の受け入れ、どんど焼き等の地域の伝統文化の事務局等、様々な交流活動を行っている。				
・きっかけ	東京から結婚を機に、Iターン。東京にはない良さに気づき、様々な活動を行っている。					
・やりがい	農業体験学習等を通じて、田舎の良さを指摘され、自分も誇らしくなる。					
・つながりの実感	この10年で農村に対する都会からの羨望のまなざしが増えたこと。山ブームが年齢の高い方中心から家族に変わってきている。					
・しかけ（工夫）	モノや情報が十分ある現在、そこに行かないと味わえない、出会いといった「体験そのもの」に大きな価値が認められる時代なのだと思います。					
・課題や問題点と対応策	大切に受け継いでいきたい阿東の魅力を生かして、阿東で育つ子供たちをはじめ、ひいては日本を担う子どもたちや世界の若い世代の成長の場となっていくことを、阿東人として伝えていきたいと思う。					

インタビュー対象	地域	阿東	年代	50	性別	男
	活動、団体名	有志			役職等	事務局
	活動内容	韓国プサン市の高校生との交流				
・きっかけ	・県民文化祭を旧阿東町で開催することとなり、プサン市の高校生から太鼓のグループを招聘することとなった。単なるイベントに終わらせたくなく、高校生を実行委員会の一員としてプサン市の高校へ出向き、継続的な交流を図ることとした。					
・やりがい	・地域の高校生が主体的に活躍し、成果を実感できたことを確認できたことがうれしかった。					
・つながりの実感	・その後、韓国の高校生と地域の高校生がホームステイなどを通じ友人となり、交流が続いている。					
・しかけ（工夫）	・イベントそのものではなく、それ以降の交流を重視したこと。 ・年間計画等を立てず、自然な形で「友情」を継続すること。					
・課題や問題点と対応策	・プサンとの交流は手段であり、「なんでもいから、面白そうだったらやってみる」こと、継続することにこだわらないようにすることを意識している。結果として、つながりができれば良いと考えている。					

インタビュー対象	地域	-	年代	50	性別	女
	活動、団体名	体操インストラクター			役職等	
	活動内容	・地域の各種団体や放課後児童クラブ、障がいを持った子どもたちや支援のいる子どもたちへの指導				
・きっかけ	・自分の子どもが、障害（発達障害）を持っており、子どもが将来自活や地域の皆さんとやっていけるように、健康で楽しい運動から取り組んでいけたらと考え始めた。					
・やりがい	・地域の高齢者の団体や支援学級・その他の団体から好評だとやりがいを感じる。					
・つながりの実感	・体操が終わってからの雑談がうれしく、そんなことまでと思うことまで話してくれる等中身の深い話が出た時等実感する。 ・個人的に相談などがあると、やはりつながりを感じる。					
・しかけ（工夫）	・指導に行く団体に合わせて、はなしの内容や終了後のミーティングの内容まで考える。					
・課題や問題点と対応策	・特に支援のいる小学生などに広めていきたい。 ・学校や地域によって取り組みが違う。 ・普及できるようにいろんな場所で訴えている。					

インタビュー対象	地域	-	年代	60	性別	女
	活動、団体名	山口市母子保健推進協議会			役職等	理事
	活動内容	地域の妊婦や乳幼児期の子育て中の家庭を訪問し、市保健師とのパイプ役となる育児学級や子育てサロンを開催				
・きっかけ	・市保健センターより依頼があった。					
・やりがい	・妊婦から乳幼児期の子育てでの悩みをきいたり、相談に乗ったりして相手が話をしてくれ、少しほっとした表情がうかがえた時 ・親子で行事に参加して楽しんでもらえた時、ママさん同士で仲間ができた時に感じる。 ・子どもの成長が見えるとき。					
・つながりの実感	・親子たちと関わりがなくなっても、どこかで出会った時に気付いてもらえ、子どもの成長を見せてもらったこと ・子どもが小・中学校に行くようになって、地域の行事で出会ったり、子育てサロンに参加してくれたこと ・母推同士で色々話ができて、共有できる考えができたとき					
・しかけ（工夫）	・母推活動を楽しく気軽にできるようにしている。 ・母子の子育て支援の行事に参加したくなるものを提案するようにする。 ・地域交流センターで活動することが多いので、母推の活動を理解してもらった上で、地域への情報発信を頼んでいる。					
・課題や問題点と対応策	・少子化の中、子育て家庭が少ないこと ・母推の活動を知らない人が多いこと ・協力してくれる人や団体を増やす。活動を知ってもらえるようにする。					

インタビュー対象	地域	-	年代	60	性別	女
	活動、団体名	山口市母子保健推進協議会			役職等	理事
	活動内容	2001年から母子保健に係る市の手伝いや家庭訪問、育児学級等の活動を行っている。				
・きっかけ	・出張所より引き受けてくれないかとの要請があり、出張所職員と保健師が来訪し、一期ならとの思いで引き受けた。					
・やりがい	・親子の笑顔や感謝の言葉に出会えた時に感じる。 ・元々子どもが好きなこともあり、育児学級等で親子とふれあう中で親が我が子を見るまなざしと子が親を見るまなざしの双方の姿に安堵し、大変な子育ての時期のほんの一部であっても微力ながら支援しているという実感があるとき					
・つながりの実感	・子どもは幼いので記憶がなくても親が覚えていてくれ、子どもが成長して関わりがなくなっても、どこかで出会ったら挨拶してくれたりする。また、同じ仲間とも地域内に限らず連帯感をもって協力し合い助け合うことができている。					
・しかけ（工夫）	・活動の対象が限られるので、地域全体での認知度は不十分だと感じているが、行事をその都度地域交流センターだよりに掲載してもらったり、地区まつりに参加して活動コーナーを設けて、団体の名前や活動を知ってもらえるよう心掛けている。 ・楽しい行事を企画・実施することだけではなく、気軽に声をかけてもらえるように接している。					
・課題や問題点と対応策	・人口が少なく少子化という地域性の中で何が求められているか何ができるかを考え、そのためには、どうしたらよいかを考えて活動したい。 ・なかなか訪問が難しい人や行事に参加されない人への対応は保健師と相談しながら関わりを持ちたいと思う。					

インタビュー対象	地域	-	年代	60	性別	女
	活動、団体名	山口市母子保健推進協議会			役職等	理事
	活動内容	妊婦さんや乳幼児をもつご家庭を訪問してお話を伺い、よき相談相手となるよう務める。また、行政の母子保健施策を伝え、保健師とのパイプ役となる。 母子の健全育成のための健康診断の介助や育児学級を行う。				
・きっかけ	・中学生のPTA役員をした時の執行部の方のお知り合いが母推をされていて、欠員があった時に声をかけられた。私自身知り合いのいない山口で子育てをして母推の訪問をとてうれしく思い、また、子どもが好きということもあって活動に参加した。					
・やりがい	・妊娠中から産後、幼児期まで数回何うごとに、段々と心を開いて話をしてもらえるように感じた時はうれしい。また、心配事などがある方は保健師につなげて良い方に向かった時もよかったと思う。 ・訪問は一人だが、育児学級や連絡会などで地区の母推たちと一緒に行事を行ったり、意見交換をしたりして一体感を感じた時はやっていてよかったと思う。					
・つながりの実感	・訪問した母子にスーパー等で声をかけられて成長した様子が見られた時 ・長く一緒に活動してきた母推同士はお互いに信頼があり、つながりを感じる。 ・地域の他の活動をされている方たちとも、ふるさとまつり等を通じてつながりができて良いと思う。					
・しかけ（工夫）	・訪問する時、活動する時も相手の話を「聞く」ということを心掛けている。 ・母推同士ではお互いに無理をしないように「その時できる人ができる事をする」を心掛けている。長く続けるためには大切なことと思う。					
・課題や問題点と対応策	・地域の皆さんにはまだまだ周知されていないこと → 知ってもらうこと ・事情があって母推を交代しないといけない時、新しく引き受けてくれる方がなかなか見つからないこと					

インタビュー対象	地域	-	年代	70	性別	男
	活動、団体名	地域づくり協議会			役職等	事務局長
	活動内容	地域づくり協議会のまとめ役				
・きっかけ	・退職後、地域の推薦で自治会長をすることとなり、地域デビューした。 ちょうど地域づくりが始まっていた。会長から声掛けいただき、共感する場面が多かったので、始めた。					
・やりがい	・事業計画を立て、実践されて、成功することで達成感を得られる。 ・地域づくりは、交付金を有効に執行することにある。					
・つながりの実感	・事務局とお世話するひととのつながりが良くないと、執行がスムーズにいかない。ののしり合いでは、うまくいかない。 ・携わっておられる皆さんは、地域は好きだが、どうしても前職の考えで進めていくので、うまくいかない時もあるが、大多数が地元の人なので、知り合いが多く進めていける。					
・しかけ（工夫）	・業務と割り切って、進めるがどうしても、個人的に進められることが多く任せて実施している。 ・地域づくり活動中に知り合いになり、お互いが協力して事業の推進ができる。 ・できるだけ地域へ出向き、お話をして繋がりを作り、強くしている。					
・課題や問題点と対応策	・地域づくり自体が、社会教育の一環であり、住んでる誰もが協力しないと進まない。人任せが多すぎる。 ・事務局の職員には、家庭環境により急きよの場合は、お互いが協力し合うことにして両立している。 ・リーダーがしっかりしているので、困難はない。					

インタビュー対象	地域	-	年代	70	性別	男
	活動、団体名	地域協育ネットコーディネーター			役職等	
	活動内容	地域協育ネットコーディネーター				
・きっかけ	・子どもの教育に関心があり、問題を抱えた児童生徒を目の当たりに見て始めようとした。					
・やりがい	・問題行動する者が振り向いてくれた時や、学校・家庭から感謝される。					
・つながりの実感	・対象者の興味を示す事柄などを聞き出して、会話が出てくことや相談があったとき ・目の前で親子の会話の成立や明るい表情を見るとホッとする。					
・しかけ（工夫）	・対象者のことばをどう引き出すか？ ・世間話やゲームの話などをする（ゲームの名前や方法も知っておくことが必要）。					
・課題や問題点と 対応策	・心を開くまでが困難であるが、一端つながりができると進んでいく。 ・対象者が子どもの場合、家族にも問題があることが多い。 ・いろんな相談方法などを紹介して一人で悩まないことを助言。					

インタビュー対象	地域	-	年代	70	性別	女
	活動、団体名	地域活動団体			役職等	代表
	活動内容	高齢者のグループ対象に訪問活動				
・きっかけ	・自らが独居となり、寂しさを紛らわすためにいろんなサークルや団体で活動し、自分の元気を取り戻した。					
・やりがい	・自分が得た技術などを、披露することでつながりや再訪を依頼されることが多い。					
・つながりの実感	・対象者の興味を示す事柄などを聞き出して、演奏であったり、お話会であったり、専門家と同行することで認められる。					
・しかけ（工夫）	・自分たちのグループの活動に興味を持って、依頼を受けた。 ・世間話やゲームなどをしながら、楽しく過ごす。					
・課題や問題点と 対応策	・理解をしてもらうまでが困難であるが、一端つながりができると再訪を依頼される。 ・対象者が大部分高齢者なので、放課後児童クラブなどにも出かけてみたい。 ・コーディネートしてもらえる方がおられると助かる。					

インタビュー対象	地域	-	年代	20	性別	女
	活動、団体名	こども明日花プロジェクト、手話サークル、さばらんて			役職等	学生
	活動内容	・こどもの学習支援、居場所づくり ・学生ボランティアの調整 ・手話の勉強、イベントでの手話歌、いけいけサロンで手話を教える。				
・きっかけ	・手話は、ろう者さんとコミュニケーションを取りたくて、子どもの頃から勉強したいと思っていた。語学を学ぶことと同じくらい大事だと思った。 ・明日花プロジェクトは、ボランティアがしたくて参加した。子どもの貧困について、ショックを受けた。ふつうの家庭で育ってきたので、自分でもできることはないかと思った。 ・さばらんてでは、ボランティアの経験が生かせるのではないかと思った。					
・やりがい	・知り合いが増えた。「ありがとう」が聞ける。自分の居場所ができました。信頼してくれる人がある。人とふれあったり、年代を問わずいろいろな人と話ができることが楽しい。					
・つながりの実感	・新しいことにチャレンジできること。つながっている人からお願いされることが増えた。 ・活動の幅が広がる。つながった人から得ることが多く、自分も誰かに何かしてあげたいと思う気持ちが強くなった。					
・しかけ（工夫）	・はじめて参加する人に、積極的に声かけやアドバイスをしている。ボランティア同士の交流を大事にして、「楽しい」と感じてもらえるように心がけている。 ・自分自身は無理をしないこと。自分をつくらず、対等な立場でコミュニケーションができるようにしている。					
・課題や問題点と対応策	・子どもに接して経験が浅かったため、最初は戸惑いもあったが、子どもがかわいいと思える。 ・負けず嫌いの性格が幸いして、続けることができています。					

インタビュー対象	地域	-	年代	40	性別	女
	活動、団体名	山口市市民活動支援センター さぼらんて			役職等	
	活動内容	・受託運営 認定NPO法人山口せわやきネットワーク 市民団体の活動をサポートする業務、団体の登録、情報発信、団体のコーディネート 各団体の活動への助言・指導 など 現在351団体が登録している（関係部署：山口市協働推進課）				
・きっかけ	・小児慢性特定疾病児を育てる親の会に参加すれば、いろいろと学習できるのではないかと思ったところ、友人の勧めがあり、面接を受けて入会した。初めのうちは、先行者のお手伝いをしたいと思って活動を始めた。 ・親の会での活動を通して、人と人とのつながりの大切さや、地域の生活の活性化を目指して活動している団体とのつながりの必要性を強く感じた。					
・やりがい	・さまざまな活動をやっている人や、何か役に立つことをしてみたいと考えている人たちの交わりを通して、「新しいことが立ち上がる」場面に立ち会う時、とても嬉しい気持ちになる。 ・来所された団体の方たちに質問したり、活動の内容をお聞きしたりしながら、活動を繋ぐことができたときに味わうことができる達成感					
・つながりの実感	・団体と団体、人と人との繋がっていると感じられる時や、繋ぐことができたと確信できるときがある。 ・相手が喜んでくださるようなコーディネートができたとき					
・しかけ（工夫）	・繋ぐために、一つ一つの話題や内容を紡いでいくように確信しながら作業を進めている。 ・繋いだネットをさらに拡大させるように促し、さらに沢山人を巻き込んでいくような仕掛けを考えながら対応している。 ・機関誌「ええやん」の記事は、スタッフに限らず、できるだけ参加してくださるお母さんたち自身に書いてもらっている。このことにより、関わってくださる人の意識が高まっていると感じている。					
・課題や問題点と対応策	・飛び込んでこられた人達の、背中をしっかりと押せないことがあると感じることがある。社会貢献度をさらに向上させたいと思っている。					

インタビュー対象	地域	-	年代	40	性別	女
	活動、団体名	山口市市民活動支援センター さぼらんて			役職等	
	活動内容	・受託運営 認定NPO法人山口せわやきネットワーク 市民団体の活動をサポートする業務 団体の登録、情報発信、団体のコーディネート 各団体の活動への助言・指導 など				
・きっかけ	・ママ友からの声かけで、幼保情報誌をつくるボランティアをしていました。このころ「さぼらんて」で会議をしていた。事業相談の中で、さぼらんてスタッフと関係ができ、声をかけられ、さぼらんてで働くようになった。					
・やりがい	・自分で活動していたことが、さぼらんてで生かされている。 ・団体が活動に自信を持って前に進み始めるのを見るとき					
・つながりの実感	・町内の親睦スポーツ大会をきっかけに、これまで地域活動に参加していなかった人を巻き込めた。					
・しかけ（工夫）	・巻き込むとき、相手の得意なことなどの情報収集をした。					
・課題や問題点と 対応策	・町内での充て職の人には、自分の活動以外に無関心の人がいる。 ・個人的なつながり、対話と意識、あきらめずに、つながるきっかけをねらっている。					

インタビュー対象	地域	-	年代	40	性別	女
	活動、団体名	発達障害のある子どもの親の会			役職等	
	活動内容	・発達障害のある子どもの親の会 ・茶話会、講座、プログラム等の情報発信など				
・きっかけ	・子どもの発達障害をきっかけに、人とつながる機会があった（紹介された。）。 同じ悩みを持つ人とつながった。 何回か集まるうちに、スタッフにと声をかけられ、さぼらんでも活動することとなった。何か恩返しをしたいという思いがある。					
・やりがい	・カフェにきた人が、「悩みが晴れた」と元気になって帰る姿を見ること					
・つながりの実感	・団体のことを「知っているよ」と言われたとき。仲間と一緒にがんばろうという同じ思いで活動しているとき。 ・子どもが療育に行って、成果が出たという声をもらった時、ともに成長を喜べる。					
・しかけ（工夫）	・パンフレットをSNSで発信する。講座のチラシを各所に配布する。					
・課題や問題点と 対応策	・カフェにしばらくの間来ていた人が来なくなること。 ・スタッフの間でも意識に温度差があること。また、やりたいことの方が違うことがある。こんな時には、話し合いによって、互いに受け入れるようにしている。					

インタビュー対象	地域	-	年代	40	性別	女
	活動、団体名	認定NPO法人山口せわやきネットワーク こども明日花プロジェクト など			役職等	
	活動内容	・地域づくり協議会情報企画部会 ・認定NPO法人山口せわやきネットワーク ・「こども食堂」実行委員				
・きっかけ	・他県より山口市に転入。地域に根差した活動をしたいと思い「こども食堂」を開催しようとしていたNPOに出会い、ボランティア活動を開始。その後、パート職員になる。また、転入者として、地域づくりに関わりたいがどのようにしたら良いか分からずに、公募されている地域づくり協議会に応募した。					
・やりがい	・NPO法人という、既成の事業にとらわれずに自由な発想で企画運営をできるのでやりがいを感じる。地域に転入してきた者としては、地域や社会課題に意識が高い人に出会いがあるので、人的ネットワークの広がりも出来る。					
・つながりの実感	・こども食堂や、学習会、寄付の教室などはこどもをはじめ、多くの大人とも接しています。感謝されたり、こちらの意図をくみ取っていただいた際には嬉しくなります。 ・同じように活動する担い手が増えていくことが大切だと思っているので、賛同して活動を協力してくれる人が増えると嬉しいです。					
・しかけ（工夫）	・自分と同じような境遇、他地域からの転入者、外国人など、地域のつながりが浅い人を誘います。自分から、いろいろな会に参加するようにしています。					
・課題や問題点と 対応策	・人とのつながりづくりが、持続可能な社会づくりにつながると思います。 ・私は、地域づくりに関心があったので、自治会、地域づくり協議会などに参加していますが、これまでの歴史が長く、役職者も高齢者が多く、なじみにくいというのが本音です。新しい意見を出しても、だいたい取り上げてもらえない。とはいえ、現在の人数が多い、元気で活発なシニア層の次世代は、人数ともに限りがある。また、就労との関係で地域づくりに、若手、やや若手は多くの時間をさけないので今までと同様な活動は不可能になる。その転換期にあることに課題意識を持って、地域行事の選別や、最小限の労力で効果を上げるためにどのようにしたら良いかを話し合う場が必要と思われます。ただし、実行にあたっては、その場の設定や、ファシリテーション力が問われ、なかなか難しいです。それよりも、NPOなどの市民活動へ所属し活動をする方が、意見を言いやすいのでそちらに意識が向いてしまいます。NPOとの連携強化の方が近道なのかもしれませんが、防災などの観点からいうと住んでいる場所での活動が重要にもなるというジレンマがあります。					

インタビュー対象	地域	県内・市内	年代	70	性別	女
	活動、団体名	山口県地域消費者団体連絡協議会			役職等	会長
	活動内容	消費者問題（山口市の団体に所属、山口県の団体の役員） 男女共同参画（山口市の団体に所属、山口県域の団体に所属） 山口市人権推進委員、保護司、自治会女性部に参画、安心安全部会見守り隊に参画				
・きっかけ	・夫の転勤で9回移動。広島県に居住した折、隣家の人によくしてもらい、子育てを支援してもらった。そこを転居する際、「よくしていただいたばかりで、何もできずに申し訳なく思う」と伝え、「私に返すのではなく、他の人にしてあげたらそれでいいのよ」と言われたことがきっかけになった。また、転勤者に対しては「よその人」というレッテルが貼られ、活動を制限されることもあった。限られた時間でその土地に暮らすことから、「一歩前に出て」その土地とかかわろうという前向きな考え方に努めるようになった。					
・やりがい	・人とつながったことを実感できること。転勤のおかげであちこちに友人・知人を得た。 ・人の価値観、考え方が異なることを身をもって知ることができた。活動に折に重要なポイントになった。 ・活動について感謝の言葉や評価をいただけたこと ・活動が具現化し、目に見える形になったこと ・自己に厳しく、他人にやさしく、寛容になれたこと。穏やかになれたこと。感謝できること。					
・つながりの実感	・暮らしの中で、落ち着いて日々行動ができる。「大丈夫」と思えること ・本音で語れる仲間がいること。理解してくれる人がいること。 ・あいさつする人が多いこと ・私事のように、喜び、悲しむ人がいること（双方向で）					
・しかけ（工夫）	・活動に巾を持たせるために、あえて違った分野の活動、趣味を持つようにした（価値観の異なる人と共に行動することは、枠を広げ、柔軟に考えられることにつながる。）。 ・横の関係で活動するように心がける。上下にならないように努める。 ・人の良さを見つけ、活動の中に活かせるように心がける。場を提供する。 ・自分の弱点を隠さずに伝える。共に活動をするという土壌を作る。					
・課題や問題点と対応策	団体の継続が難しい中で、次の後継者を育てることが課題 「構えずにその人らしくする」「前後を気にせずにやる」ということは、日々伝えているつもりなのですが・・・					

インタビュー対象	地域	県域	年代	70	性別	男
	活動、団体名	青少年教育、地域づくり、成人教育			役職等	
	活動内容	・山口市などの地域で、青少年の諸活動に関わる業務に幅広く関わらせてもらっている。 ・青少年の健全育成のための諸活動、主として発達年齢に合わせた野外活動、集団活動等を通して、特に青少年の感性の発達を促す社会教育活動 ・自然の成り立ちについての学習等による地球環境の保護・保全など環境学習の推進				
・きっかけ	・社会教育に関する活動は、23歳の頃から、社会教育講座で地図の指導を始めてから ・1972年に、国民健康増進事業の一環として導入された（当時の総理府）オリエンテーリングの全国への普及事業に、地図の専門家として参画し、西日本の普及活動を推進。 ・その後、自然教育に関する諸活動（野外活動、学習支援など）、青少年の育成にかかる指導・支援事業を展開、青少年健全育成、環境保護・保全活動などに関わらせてもらっている。					
・やりがい	・学校教育に限らず、多様な場で、青少年の感性の向上、知力・体力などの成長とともに体験しながら見ることができること ・活動を通して、多様なスキルや考えを持ち、意欲的に関わる人との出会い・ふれあいが豊かにされ、さらなる活動の原動力となっている。 ・企画する楽しみの共有					
・つながりの実感	・地域活動の課題と目標を共有するのみに限らず、暮らしの様式（生活様式）や生き方を共鳴する人・団体との協働がなされるとき。 ・つーかーで通じ合える環境が創られる。					
・しかけ（工夫）	・準備9割、結果は1割 ・目的・目標の共有に力を注ぐ → 平素の関わりを大切にする。 ・「好きこそ」大成の基本 → 自分自身がおもしろいと感じられる。 ・理論的に裏打ちと理念の明確化 ・実際に於いては、参加者にできることから実践してもらうこと ・興味本位の仕掛けをしない。 ・企画のネーミングは、参加の可能性のある人に、具体的にわかりやすいものに ・一過性にならないように工夫					
・課題や問題点と 対応策	・企画、活動などのジャンルが広範にわたるようになり、一つ一つの内容の深化を図ることが難しいと考える場合が増えてきた。 → 後継者の養成を図る。 ・人材の育成から「人材」の育成へ ・理論と理念の構築が疎かにならないこと。そうでないと、活動の持続性、活動の成果が蓄積されない。 ・快楽を主眼とする、一過性な企画は、弊害となる。					

インタビュー対象	地域	県内全域	年代	30	性別	男
	活動、団体名	山口大学ほか			役職等	コーディネーター
	活動内容	山口県内において、県内企業・自治体・高等教育機関等とともに地域志向カリキュラムの開発を通じて、地元定着を促進する事業のコーディネーターを務めている。また、山口の若手経営者等と地域を担うリーダー育成を目指した勉強会を主宰。さらに、地域活動として子どもの学習・居場所等の支援に係るNPOの事務局ボランティアに参画中。2020年からライターとして魅力的な人と場所を県内の人向けに紹介する記事を執筆中。				
・きっかけ	・関西で産官学民が連携して次代を担う若者の育成に取り組んでいたが、その様子を見た大学教員からの紹介で、山口地域における産官学の連携事業に参画。コーディネーター職で山口県に移住・転職した。 ・移住後に地域活動で知り合った団体の主催する勉強会で、講師と主催者に誘われNPOの事務局ボランティアに参画。さらに、山口県東京事務所での講演をキッカゲに知り合った県内出身の学生（現、山口県内の経営者）の方々と、関西在住時から繋がりのあった山口出身者の経営者の帰省に合わせて勉強会を開催することとなった。 ・県内各地のイベント等に顔を出したり、お手伝いしたりすることで、人の紹介の紹介を通じて、雑誌のライターやイベントのファシリテーターを頼まれるようになっていった。					
・やりがい	・県外の人はもちろん、県内の人も未発掘の資源（人・モノ・コトなどの可能性）がたくさんあり、それらに関わることができること。また、なにもないことに嘆いている人がいる一方で、新旧問わずに価値を創造している挑戦的な人たちがいらっしやること。また、保守的と言われるが革新的な行動に否定的ではないこと。 ・子どもたちと直接関わることで社会の生きづらさや困難の片鱗に触れることができること。このままではいけないと強く感じることができる。 ・授業やイベント等で知り合った人同士が協働で新たな企画などの価値を生み出していく例がいくつもあること。たとえば当初、参加者として来てくれた学生が、次年度は自分たちで企画づくり・講師折衝・広報PR・パスの手配から助成金の獲得を行い、さらに新規企画を立ち上げて自走してくれた。					
・つながりの実感	・勉強会や記事作成におけるゲストとして参加してくれていること。また、団体間を通じて企画のゲストとして招聘していただけるなど、双方向で連携がスムーズにとれること。さらに、ゲストからの紹介で別のゲストを紹介していただくなど、関係に広がりができた。 ・毎回会場や企画の趣旨に沿った程度の集客（3人～1,500名程度）ができていくこと。開催場所にもよるが、山口市をはじめ下関から岩国、そして県外からイベント等のために集まっていただけでありがたい。 ある島で獣害に困っている人がいると聞き、別の市にある行きつけのお店でハンター兼シェフの人を紹介させていただいたら、翌日には視察に来てくれると相談に乗っていただいた。その後、島に同行いただき獣害対策についてアドバイス等でご助力いただいた。					
・しかけ（工夫）	・得てしてイベント等の募集は行っている活動が見られる中、イベント等の募集時と開催報告、途中経過を含め公式HPと個人のSNS、さらにメンバー等の協力を得てさまざまな媒体を用いて、届けたい対象に沿った情報発信を心がけている。それを見てくださる人たちとは弱い紐帯の繋がりで、連携を行いたいときにスムーズに行えるとともに、団体や活動の信頼感を得られていると感じる。 ・一人でできることより、多くの人の協力を前提としたビジョンを共有するように心がけている。いわゆる「志」を提示することで、共感する人がプロジェクトに参画してくださることが多く、最終的な満足度も高いと思われる。また、実働の部分のみではなく計画段階から参画いただき、会議前後のヒアリングや意見交換などを通じて、協働ができる関係構築に務めている。 ・家庭はもっていないため両立ができているか不明ではあるが、仕事とプライベートを分けずに、すべての物事をライフワークの一環として捉えて、社会性やビジョン、貢献できる度合いに応じて優先順位をつけて、なるべく適材適所となるように心がけている。 ・活動の種類や内容にもよるが、基本ボランティア依存で持続可能性が乏しい。とくに社会的地位や収入が低い若者でも継続できるように、寸志でも謝金対応できるように予算取りを行い、仕事として受けてもらっている。					
・課題や問題点と対応策	・上記にも関連するが、とくに教育関連の委員においては参画者の社会的属性の偏りが先行研究でも指摘されている。学校運営に献身的な人たちが関わっていることは尊敬する。一方で、前年度踏襲型による形骸化や生徒児童の参加が見られないことによる主体者の不在なども憂慮される。「近頃の若者は」と嘆くよりも、次世代とくに10代から20代になるべく役割（裁量）を譲って、自分たちで地域を担えるように機会を提供したい。					

